

毛沢東時代に回帰する習近平

ポストモダンといわれて久しい現代にあつて、中世末期の絶対王政のごとき強権政治があの巨大な中国を舞台に展開されようとしている。第20回中国共産党大会後の重要会議において習近平は2期10年という慣例を破り、3期目の党総書記となった。のみならず、最高指導部の政治局常務委員7人、中央政治局24人のほとんどを側近で固めた。集団指導体制は崩され、習一極体制となった。

現実的基盤欠いた思想

実際、習の思想と行動には、かの絶対的権力者・毛沢東の影響がきわめて強い。習にとっては毛がすべてなのであろう。毛時代の再現か。ならば振り返っておくべきは毛時代の転変である。

毛の思想の淵源は、解放区コミューンの時代に形成されたユーロピア社会主義にある。空想的であり観念的であり、そして純粹であり極左的な思想であった。解放区コミューンで統御可能な小地域においてとはともかく、建国後すでに5億を超える民を擁した大国の建設に、ユーロピア社会主義をもつ

て臨んだのであれば、その結果は惨たるものならざるを得なかつた。しかし、毛は社会主義の解釈権を独占し、その左傾を制止しようとする勢力のすべてを「右翼日和見主義者」「修正主義者」として葬り去つた。毛のユーロピア社会主義は、他面では苛烈な暴力となつて社会を壟断した。

社会主義像がユーロピア的であればあるほど、現実との乖離幅が大きくなり、それゆえ毛思想の現実化は社会の苦窮を激しいものとした。毛の「冒進」を諭す「実権派」との軋轢は不可避であつた。

現実的基盤欠いたユーロピア思想は見果てぬ夢であり、これを現実にも引きもどつてするもう一つの政治勢力を生みつけた。しかし、毛にはこの実権派はみずからに歯向かう「階級敵」としか映らなかつた。それゆえ毛にとつて階級闘争は恒常的であつた。階級敵との闘いが、整風運動であり反

正論



拓殖大学顧問 渡辺 利夫

右派闘争であり廬山会議であり、何よりも文化大革命(文革)であつた。毛の政治的エネルギーのすべてが毛流の階級闘争(「継続革命」)に費やされた。

権力強化が自己目的化

文革の惨たる帰結、毛の死去を経て、中国の体制立て直しを図るべく新たに登場したのが鄧小平である。鄧は毛へのアンチテーゼとして生産力主義を掲げた。鄧にとつての共産党とは中国「現代化」のための前衛党であり、階級闘争

あつては鄧の生産力主義は拠るべきものではない。権力を手にして表現しようという習の社会像は不鮮明である一方、権力それ自体は突き出している。権力の強化そのものが自己目的化しているのである。

このころ習近平が頻繁に用いる用語が「共同富裕」である。かつて毛沢東が打ち出した概念の再利用だが、成長よりも分配に力点を置いた社会主義的政策によつて党内の支持を得ようという目論見であろう。少子高齢化に伴う社会的活力衰退のこの時代の中国を「共同富裕」によつて運営できようとは思えないが、習はこれに突き進むようとしている。大手IT企業などに象徴される富裕層の富を「調整」し、それを低所得者層に向けて再配分するということである。企業内の共産党組織を一段と強固なものにするこにより、これが可能となる習はみていない。

反腐敗のスローガンにより政敵のほとんどを葬つた。習の方針に抗う指導者はいない。毛の「冒進」を押しとどめた実権派は現代の中国においては鳴りを潜めている。

懸念される対外危機演出

武漢に発した新型コロナウイルスを習は2カ月半の都市封鎖(封城)によつて乗り切つた。2年を経て今度は上海という最大都市で感染が急拡大したものの、これにも封城をもつて対処している。封城を指揮した当時の上海市委書記が李強であり、今回の人事において李は習に次ぐポストを手にした。このかつてない強力な住民統制が市民に与えた不満、恐怖、絶望には計り知れないものがあるが、習や李にとつては何ごとも力で抑え込むことができると思つた成功体験だったのであろう。

習政権は国内的不満を強権で抑え込み、それがもはや限界と認識される場合には対外的危機を演出するのであろう。独裁国家の常套手段である。「戦狼外交」と言われるがごとくである。台湾は中国の核心的利益の中の核心だと習は繰り返している。国内統治での失政は台湾統一という歴史的使命を成し遂げることによつて挽回できると、という論法なのであろう。(わたなべ としお)